

栄光のキリスト

(出エジプト記 24 章 9-11 節 マタイによる福音書 17 章 1-13 節)

2021 年 3 月 14 日 主日礼拝

日本基督教団 仙川教会

大串肇牧師

イエスはペトロ、ヤコブ、ヨハネの 3 人の弟子たちを連れて高い山に登られました。すると、

イエスの姿が彼らの目の前で変わり、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった。見ると、モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合っていた。(2-3 節)

というのです。このイエスの山上の変貌という奇跡は有名な物語です。しかし、これは作り話であるとか、弟子たちの幻に過ぎないのではないか、そういう疑念が向けられています。それにもかかわらず、神話や幻にしては、この中で交わされている会話は実に生き生きとしていることも否定しがたい事実です。

ここで注目すべきことに、イエスは旧約聖書のモーセとエリヤと語り合っていました。その光景に弟子は圧倒されています。「主よ、わたしたちがここにいるのはすばらしいことです」と。

しかし、何故そのような旧約のヒーロたちがここにいるのかペトロにはその深い意味が分かりませんでした。モーセとエリヤ。モーセは律法を示し、エリヤは偉大な預言者。律法と預言、つまり「旧約聖書」全体がイエスを神の子、真実のメシヤとして証言しているのです。

ペトロがこう話しているうちに、光り輝く雲が彼らを覆った。すると、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」という声が雲の中から聞こえた。弟子たちはこれを聞いてひれ伏し、非常に恐れた。(5-6 節)

弟子たちはこの神の声を聞き非常に恐れしました。その恐れとはかつて預言者イザヤが神に出会った時、自らの汚れた姿、民の罪の姿に気付き恐れたのに似てはいないでしょうか。わたしたちは聖なる神の前であって自分の本当の姿に出会うのです。その恐れは真実です。わたしたちが自分の栄光をこの世に打ちたて、

自分の思いに縛られているとき、神の栄光は見えなくなっています。このような罪の姿で神の御前に出ることが出来ない。その負い目を負いながら、実は罪に目をつぶりながら生活している。びくびくしながら不安の中を生きている。それが罪です。

ところが、この罪と死んだような人生から救い出すためにイエスは十字架に付かれたのです。この物語は決して作り話でも、幻でもありません。ここにはイエスが神の子であることに気付かされ、神に出会い、自らの罪が露にされた真実があります。イエスは神の子でありながら十字架によって、わたしたちと同じ罪を負って死なれたのです。栄光とは程遠い闇の世界に移されたのです。

しかし、これがゴールではなかったのです。「**イエスは三日目に復活することになっている**」一、イエスご自身が既に明かされたように、イエスは復活され、死と滅びに勝利されたのです。その栄光が今やこの山上の物語で先取りされた形で弟子たちに示されたのです。では、この御子の栄光である復活の勝利と栄光はわたしたちにとってどのような意味があるのでしょうか。

イエスは近づき、彼らに手を触れて言われた。「起きなさい。恐れることはない。」 彼らが顔を上げて見ると、イエスのほかにはだれもいなかった (7-8 節)

イエスは罪に恐れ不安に怯える弟子たちに近づき、歩み寄られ、「**起きなさい。恐れることはない**」と語りかえられました。

この「**近づく**」(プロセルコマイ) という言葉は、マタイによる福音書ではここを含めて2回しか出てまいりません (マタイ28:18)。そこは復活の主イエスが弟子たちに現れた場面です。復活の後、ガリラヤの、やはり山上で、イエスの方から人々に「**近寄って来て言われた**」とあります。しかし、弟子たちの中にはイエスを信じている人たちだけではありませんでした。イエスの弟子であったにもかかわらず、復活を尚も疑う者もいたのです。

しかしながら、復活の栄光と勝利にともに与ることが出来たのは信仰の強い人だけではありませんでした。まさに罪深い、あるいは疑い深い人々にも照らされたのです。ですから、イエス自らわたしたちに近づき、歩みより、そして最後に「**恐れるな。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる**」と約束されたのです。

自分のことだけでいつも精一杯で、不安に怯え、疑い深いわたしたちにも、この栄光のキリストの約束は向けられています。赦しと慰めは、キリストに救いを求める人ならば誰にでも向けられているのです。「**起きなさい。恐れることはない**」と。お祈り致します。